

## ドクターNAKAMURAの 健康道場



Vol.25  
贅沢をしたい  
遺伝子？

なに～！そうか、そういうことだったのか？ 私は四十四歳。ぶ～たれた中間管理職、世の中の流れに抗うではなく右向け右で荒波が立たぬよう皆と同じようにしていた。職場においても日常生活においても。そして今、こうして健康道場で自分が死の淵に打ち上げられた理由を探し求め座禅を組んでいるのだ。

今たった今、悟りを開いた。自分がなぜここにいるのか。何故に死の淵まで押し流されてしまったのか。今までの自分が何であったのか。事の顛末は私の遺伝子と社会の欲望の狭間で押し潰された結果にすぎないのだ。行軍を続ける蟻の中で誰かの指で押しつぶされてしまった、たった一匹の蟻が私なのだ。平民であればあるほど、そりゃ殿様の気分を味わってみたいよね。めっそうもない。代官レベルで十分。皆よりちょっとだけ裕福でありたい。目立つのは困

るから、皆よりほんのちょっとだけ上から目線でいたい。それが庶民の願望ではなからうか？だから、いい車に乗りたい。エレベーターがあるなら誰より先に乗りたい。階段で登るなんてエレベーターに乗れない下層階級の間人だろう。俺は君たちより優れた人間だからエレベーターで楽に上に上がれるんだぜ。皆がそう感じていたはずだ。悲しいかな、これも我々の遺伝子に刷り込まれた貧困コンプレックスなのだ。ファミレスに入って見栄を張って、ちょっとだけお高いステーキを頼んでしまう。霜降りの肉を食おうものなら、俺って裕福だよなと自分に酔いしれ自画自賛してしまう。自分の視線では人より上に行っているつもりが、他人の目線では他人の私欲を満足させる下層階級の一人にすぎない。これこそが国民総中流のトリックなのだ。

気が付けばカロリーの高いものを食べ身体に負担をかけ、身体を動かすことを拒み運動をするための筋肉を消滅させてしまっている。金儲けをするためにトリックを与える世の中とちょっとでも贅沢をしたい遺伝子の間でエゴがぶつかり合っている社会が成り立っているのだ。

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科  
(県立中央病院 前)

院長 中村 陽一